

八十四年ほど前 花輪駅から小中大滝への道々の記 その2

〔岩澤正作氏著『黒川峡中小中川溪谷探勝記』より〕

講師 藤井 実さん（東町花輪）

見あきない眺めに一行はスツカリ落ち着き、ゆつくり昼の馳走を受け、午後一時三十分坂本氏兄弟の道案内でようやく出発した。

オツケ橋大滝間

追付橋を渡り飯野串峠（小中根利の道路）に向かう道と別れ、小中川本流の右岸に沿って小中川の谷に入る。

この道路は測量部五万分一 of 地図にも載っていない林道で、横木を並べただけのそりみち橋道。

道の右端は小中川の深い河底へと落ち込み、左は山すそが迫り険しく凸凹している。場所によつては棧橋を架けた所もある。

進むこと約十五分。字白倉しろくらか

見あきない眺めに一行はスツカリ落ち着き、ゆつくり昼の馳走を受け、午後一時三十分坂本氏兄弟の道案内でようやく出発した。

丸木橋を渡り、転がっている石々を踏んで左岸に出る。

それから山の中腹を通り木々の間をたどること約七分、左側の足下に「山姥の滝」がある。

カヤやヤブをかきわけ崖の上から山姥の滝を臨めば、上流は大きな岩がころがっており、下流は河床は甌穴状になっている。

河床は硅岩盤となっており、その中央部は河水の侵蝕を受け幅一メートルあまりの水路のように貫いて流れ、下方の急斜面の岩場からは十数メートル落下している。

滝の兩岸は岩が石の門のよう

に突き出ており、滝の下部は広い洞穴となっている。

殊に左岸の滝の下に流れ込んだ川水は、右岸の下方より流出しすこぶる奇勝となっている。

滝の上流部の右側は切り立った険しい崖が続いている。

左岸側が二段となっており、下段の幅一〜二メートル、上段は高さ約二メートル、幅一メートル半ばである。

表面は凸凹し一部に小さな水をためている凹みがある。

殊に上下段共に赤白の石の組み合わせが交互して美しい。

二時十五分出発、二百数十メートルばかり進むと、木梯はしを下ること二回にして河床に下りる。

岩のもとやゴロゴロした石の間を進むこと二十メートルほどで再び山すそに入る。

ホタルブクロ、フヂウツギ、ヒョドリバナ、チャンハギク等

の花を見る。

進むこと七〜八分にして炭焼小舎があり、尚進むこと四〜五分にしてまた炭焼小舎ある。

これより約三分、左の下方に小滝がある。

小滝

上流は幅一メートルほどの水路を通り抜け緩やかに流れおち、約十メートルの先の急な崖に小滝はかかっている。直下七メートルほどである。

滝の下は直径数メートルの滝壺となっており、滝壺の周囲は岩壁が廻っている。

川の水は左岸下方より流れ出し小さな滝になっている。

滝の左岸には硅岩の大露頭があり、小滝を見おろすのによい場所である。

小滝の上流約二十五余メートル先に、又一瀑がかかっている。里人は滝の名を呼ばず「丸淵」

と呼んでいる。

丸淵

小滝の上流二十五余メートルを隔てた急な断崖にあつて幅約二メートル弱、高さ約十メートル弱。

滝下には円形の滝壺がある。

滝の上にもまた円形の甌穴があつて、滝の上下に丸き淵があることで丸淵と呼ぶのだろう。

小滝と併せ景勝の地である。

二時五十五分出発。草いきれする山腹を辿ること約五分の地に炭焼小舎三軒がある。

三時十分天狗岩に到達する。東裾^{すそ}より南腹に上ること約三分。

南腹の中間には崩壊して分岐した巖頭に栈橋がかかつている。

此の巖頭^{がんとう}より西方約二百余メートル先に、大滝がとうとうと音を響かせ落下するのを見る。

大滝

大滝は袈裟丸山の東南山腹の二子山の西方猿倉より賽の河原を経て、ほぼ南北に連る尾根の東部に生じた断崖にかかる滝である。

天狗岩の南腹より望見すると、西方にほぼ南北に連る尾根があり、そこにうつつけの杉林が広がっている。

その前面には険しい角張った岩に、松や柏の雑木がほどよく生えている一つの尾根がある。

そして、そのほぼ中央部を侵蝕して落下する、幅約七メートル、高さ約四十メートルと目測する滝がとうとうと流れ落ちている。

しかし、ここではその全幅を望み見ることができない。

そこで、引き返し天狗岩の頂部より西北腹に下り、その北の方にある滝見岩にいつて望見した。

大滝は赤城山中の滝沢不動滝の高さ四十数メートルという滝より勝るように思う。

ただ滝沢不動滝は、滝壺が近く滝を見上げることができ、華厳の滝のように直下しているため姿全体を見ることができ。

一方大滝は、遠くからしか見ることができない。少し傾斜しており全体を望み見ることができれば五十数メートルもあるのだろうか。

何れにしても大滝は県下有数の瀑布であることについて無用な説明を加える必要はあるまい。

滝見岩は岩の高さ約七メートル、珪岩の露頭でその南側にはシノブがいっぱいに広がり生い茂って美しい。

天狗岩附近にはミヤママコナ、コメツツジ等の花を見た。

滝見岩で観測中に西北の空に入道雲が出て、雷神も鳴り出し

たので急ぎ帰路についた。

三時三十五分、天狗岩をたち、来た道をもどり、炭焼小舎に下り、笕の水に渴きをいやし同四十五分出発。

小舎の下より左に登り山腹の細い道を辿ること十二三分で「字タレハキター」に着いて、東沢の斜面に出た。

「タアー」とは窪地の方言で「タレハキ窪」の意であると坂本氏は説明した。

この所で柏谷足越より賽の河原方面への林道に出くわす。

これより林道を辿るので、途中には横木をしいただけのソリ用の栈橋が多々ある。四時二十分字大坂に着いた。

大坂と云ふが林道の開鑿により切割となっている。右崖上に十二山神を祭っているようだ。

~~~~~  
次回は、最終回。

一行は、花輪駅へ向かいます。